

建築の哲学

——カッコ嬢との対話——

篠原 資明

序 反交通装置としての建築

建築について語ろうと思う。

(なぜ建築なの?)

反交通について考えているうち、建築のことに思いついたんだ。

(反交通というと、交通様態のひとつのこと?)

そう。あいだ哲学の方法論として交通論を提唱してきたのは、知ってるよね。

(単交通、双交通、反交通、異交通という四つの交通様態からなるという、例のやつ?)

あいだには、それら四つの交通様態が想定されると考えたのが、発想の原点だったんだ。

(で、反交通として建築を考えようというの?)

正確にいうと、建築とは、人の移動に関する反交通装置と定義できるんじゃないか、と思いついたんだ。

(いきなり定義ですか?)

単に反交通装置とするのではなく、人の移動に関する、と付けくわえたところがミソだね。

(なに、その秘密めかしたいいいようは?)

いや、そんなに大層なことでもなくて。たとえば、防波堤のような波の移動に関する反交通装置とか、情報の交通に関する反交通装置などは、建築として考えなくってもいいんじゃないかと、思っただけなんだ。

(じゃあ、ベルリンの壁は、建築になるの?)

いいところを突いてきたね。ベルリンの壁は人の移動を制限していたわけだから、まさに人の移動に関する反交通装置だったわけだ。

(あと、万里の長城とか)

そうだね、考えだしたら切りがないくらい。人の移動に関して交通遮断が必要だったからこそ、人は建築を必要としたと思いたくなるほどだ。

(でも、交通遮断だけでは、建築にならないんじゃない?)

そこが問題なんだ。ベルリンの壁だって、全面的に遮断していたわけではない。

しかるべき手続きさえとれば、通過できる場合もあった。たとえば、認められることが、めったになかったとしても。

(ほかの交通様態との関係は、どうなの?)

すぐにも思いあたるのは、双交通との関係かな。

1 反交通と双交通

たとえば、自分の家のことを考えるといいんじゃないかな。基本的に家族は出入りが自由で、家族以外は制限されるでしょ。出たり入ったりという双交通が許される人と許されない人がいる。建築が人の移動に関する反交通装置だというとき、それは、移動を制限されるがわに重点を置いているわけで、制限されないがわからずると、たいていの場合、双交通が許されるということになるわけだ。

(そうすると、建築というのは、人の移動に関する反交通と双交通との組み合わせってこと?)

ただ、基本は、あくまで反交通装置というところにある。なぜなら双交通以外の様態も考えなくちゃいけないから。

(家と家族についてなら、反交通と双交通のことはわかるけど、建築というのは、そういった住宅建築ばかりじゃないでしょ?)

でも、公的な建築だって、基本は、そうじゃない? 都道府県の庁舎や市庁舎など、自治体の建物だって、国の建物だって、一見、誰でも入れそうだけど、かならずしもそうではない。極端にいうと、テロや強盗など、犯罪目的での出入りを認めているところなど、ないでしょ。

(京大だって、関係者以外立ち入り禁止になっているものね)

そう、たとえ現実問題として立ち入り自由になっているとしても、ね。営利企業や軍事施設になると、さらにチェックが厳しくなるだろうし、大学でも私学では、けっこう厳しく出入りをチェックされている。

(それって、人間社会のありようそのものかもしれないね)

人間社会、ひいては人間生活のモデルそのものといってもよいかもしれない。だって、排除のない人間生活って、考えにくいから。

(同じ家の中だって、子供の部屋に親が自由に出入りできなかったりは、ざらだし、そういえば、秘書付きの役職者の部屋には、断りなく入ることはできないものね)

その点、ドアや引き戸というのは、反交通と双交通との両方にかかわる機能をもっている。壁が基本的には、反交通の機能にかかわるのと対照的だね。壁を自由に出入りできるようにしようとすれば、そこに穴をあけるか壊すかしかないけど、

そうなると犯罪になっちゃう。

(そうか、ドアは出入りを認められると壊さなくても入ることができるし、行儀よく出ていくこともできる。出入りを認めないと閉めきったままにすればいいだけなものね)

鍵や暗証番号は、双交通を許された者への小道具ないしは情報というわけだ。

(どんどん話が広がっていくね)

出入りを許されるか否かは、人によって振り分けられるだけではない。たとえば原発事故後の福島原発施設への出入りのことを考えればわかるとおり、放射性物質からの汚染対策として、特別な防御服を身につけないと、入れないとか。

(そこまでいくと、出入りのチェックも死活問題だね)

2 死への単交通

反交通に双交通をプラスすることで、イメージしやすい建築の話に近づけたのではないかな。でも、単交通については、どうだろう。

(単交通というと、一方向的な交通様態でしょ。要するに、入ったきり出てこれないってこと？　なんか怖そう)

事実、生と死を分かち壁を通過するのは、基本的には単交通でしかありえないよね。極端な例を挙げると、ナチスの強制収容所にあったとされるガス室は、そこに入ると生きてかえれなかったはずだから、ガス室の壁は反交通と単交通の組み合わせといってよいものだった。

(平安京では、死を忌む慣習があったので、死にそうな人は宮中の外に出されたという話を聞いたことがある)

それこそ、『源氏物語』の第一帖に書かれているとおりで、桐壺更衣は、あんなに天皇の寵愛を受けていても、死にそうになると母の実家に戻されて、そこで死を迎えてしまうんだね。子供の光の君も、母の忌中だということで、しばらく宮中に戻ってこれなくなったほど、単交通と反交通にかかわる禁制は、きびしいものだった。

(でも、お墓はどうなの?)

ポイントは、そこだね。さきほど挙げた例では、生者がそこを通ると生きてかえれなくなるという話だったけど、墓の場合は、通過する前に死者となっているのが普通だからね。

(妙な突っこみを入れるようだけど、遺体にせよ、遺灰にせよ、出し入れはできなくもないから、よけい複雑になりそう)

いろんな扱いが可能とは思うけど、やはり、生者が死者となって入れられる場所

としての墓は、どうしても建築として扱いたい。理由は二つあって、まず、死者もまた人として扱いたいというのが一つ、もう一つは、ピラミッドのような例を見るとわかるだろうけど、歴史的に代表的な建築物と見なされてきたという事実もあるからなんだ。

(いずれにせよ、墓という反交通装置は、死者が生者として戻ってくるのを妨げる。そういう意味でも単交通と組み合わさっているわけね)

そのような意味で、墓は、社会の中で生と死を分かつのに寄与してもいる。どんな社会も、死者が生者の生活にむやみに闖入してこないよう、いろんなかたちで工夫を凝らしているはずだから。

(墓は、死者を忘れないための記憶装置であるとともに、死者の思い出にやたらつきまといわれないようにする忘却装置でもあるってこと)

それもまた、人の世の真実じゃない？ 日々の生活を営むのは、それだけでも大変なことだから、死者のことにかかずらってばかりいるわけにもいかないんだな。

3 異交通 — 軟体構築

反交通装置としての建築には、表と裏があることも忘れるわけにはいかない。つまり、内にこもることもできれば、表の顔になることもできる。

(内にこもるというのは、その中で生活するってことよね)

最初は、からっぽの空間でも、その中で生活したり、仕事をしたりしているうち、しだいにその人の色に染まってくるし、その人の思い出の不可欠の部分ともなってしまう。だから、その人がなにかの事情でいなくなってから訪れたりすると、その中で過ごされた独特の時の香りのようなものが強く感じられもするんだな。

(そういうのを二重生成っていうんでしょ)

交通様態でいいかえると、異交通。復習しておく、異交通とは、たがいの異質性を保持しながら、さらなる異質性を生成させる交通様態のこと。特に、反交通装置の内側で起こる異交通ないしは二重生成のことを、軟体構築と呼んでいることは、知っているよね。

(ボンジュの詩から発想した造語でしょ)

そう、ボンジュは、詩集『物の味方』の中で、いくつか軟体動物を詠んでいるけど、貝類のように身の丈に合った住まいに住みつづけて、内側を宝石箱のように磨きあげる生き物が大好きだった。

(下手をすると、自分の好きなフィギュアのコレクションで室内をいっぱいにするアニメ・オタクみたいになっちゃうかも)

でも、それも軟体構築の究極のあり方だよ。ちょうど貝類が、外界から身を閉ざしながらも、吸収したものを分泌しなおして、貝殻の内側をきれいに作りあげていくのと同様に、オタクは彼らなりに大好きなアニメを吸収し、アニメで育まれた夢で室内を飾ろうとする。フィギュア・コレクションは、そういった夢の分泌物みたいなものじゃない？

(そうすると、いにしえの隠者たちによる草庵生活も、軟体構築的ってことになるのかな？)

あの鴨長明だって、世捨て人のような顔をしながら、歌集や仏典、仏画、楽器など、以前の洗練された生活の残滓で方丈の草庵を飾りたてていたわけだからね。UCLA の教授で日本文化の研究者だったマイケル・F・マルラは、鴨長明をオタクの先人と呼んでいくくらいだ。

4 異交通 一 風景

反交通装置としての建築は、さっきもいったとおり、裏だけでなく、表の顔をもち。つまり風景の一角を占めるってことだね。

(風景って、自然の風景、それとも都市風景？)

どちらでもいいし、どちらもでもいい。

(これ見よがしに目立つ建築もあれば、あるかなきかの地味な建築もあるけど、どちらでもいいの？)

基本的には、どちらでもいい。いずれにせよ、どんな建築でも、それがあるかないかで風景の見え方が変わってしまうし、当の建築もまた、どんな風景に置かれるかで、その見え方が変わってしまう。いわば、風景と建築のあいだで二重生成ないしは異交通が起こる。そこが大事なんだな。

(そういえば、久しぶりに訪れた場所で、あったはずの建物がなくなっていたりすると、なんともいえないほどのショックを受けることがある)

風景の一角を占めていたはずだから、風景がまるごと変わったと感じてしまうんだな。極端にいうと、再訪したはずの場所が、はなから別の場所だったように感じるかもしれない。

(子供のころ過ごしたところをたずねたとき、あったはずの山が削りとられていたことがあるけど、そのときの違和感と、基本的に同じなのかな？)

そうだね。風景と人とのあいだという点からいえば、基本的に変わりはない。ただ、問題は、慣れがあることかな。

(慣れっていうと？)

たとえば、なじんでいた風景があるとするよね。長く思い出の大切な部分を占め

つづけてもきた風景。そんな風景でも、新たな建設計画がもちあがるとか、工事の話があったりすると、いとも簡単に壊されたり、建てなおされたりするという経験は、いくらでもあるじゃない。

(そういえば、平成になってから、京都駅の風景など、劇的なまでに変わった)

駅ビルのデザイン・コンペで採用された案が公表されたときは、大変な反対意見が続出したことを、いまでもよく覚えている。駅ビルが完成した当座も、京都駅に向かうタクシーの中で、どれだけ運転手の毒舌を聞かされたことか。でも、あんなに罵倒されていた駅ビルも、いつのまにか風景になじみ、駅の風景の不可欠の部分となってしまうている。

(建築が風景の顔となる、一種の怖さかしら)

ちょうど同じようなことが、大学生のころ、京都タワーができたときにもあって、ある大学の先生など、地震で京都タワーだけ壊れてしまえ、などという意味不明な論陣(?)を張ってもいた。そんな悪評不評も、しばらくすると鳴りをひそめ、いつとはなしに駅前の風景になじみ、駅前の風景の顔のようになってしまう。

(それって、なんだか音楽の経験に似ているかも)

えっ。どういうこと?

(だって、それまでは、この作曲家のこの曲でなくては、というくらい入れあげていても、たまたま聞いた別の曲に身も心も奪われてしまうってこと、あるじゃない?)

うーん、微妙に違う気がしないでもないけど、でも、生成変化を肯定するという、基本的なところで通底するかもしれない。

(ええっ、どういう意味?)

つまりね、芸術も、建築を含む風景も、生成変化の中にあり、それらの美しさも、深い意味で変化を肯定するところからくるってこと。

結 移ろいの中で

考えてみれば、風景自体が移ろいの中にある。そして建築は、そんな風景の一角を占める一方で、建築自体が風景を見る装置、感じとる装置を備えているよね。

(たとえば、窓とか?)

窓に、縁側やテラス、屋上とか。そういったところから見る風景の移ろいもまた、建築経験の大切な部分となっているんじゃない?

(庭の自然の移ろいを見る喜びなら、よくわかる)

庭は、まさに建築の内なる自然風景といえるかもしれない。坪庭、中庭、それだ

けでなく垣根の内側の庭も含めて。

(振り出しに戻っちゃうけど、反交通装置という定義は、どうなったの?)

そういう基本的な定義は変わらないよ。だって、壁だけでも、建築は建築だからね。それに、壁だけでも、風景の一角を占めるわけだしね。ただ、目の前に同じ壁ばかりが立ちふさがっていると、いかにそれが移ろう風景の一角を占めるとはいえ、またある種の慣れのせいになじんしてしまうとはいえ、どこか変えたくなるというのも、事実だ。

(落書きも、そうかな)

落書きと片付けていいかどうか、わからないけど、ベルリンの壁にたくさんの絵が描かれたことがあった。

(反交通と異交通の合体かしら)

うまいこと、いってくれるね。